第８課　信仰への道

【暗唱聖句】

「しかし、聖書はすべてのものを罪の支配下に閉じ込めたのです。それは、神の約束が、イエス・キリストへの信仰によって、信じる人々に与えられるようになるためでした」ガラテヤ3:22

【今週のテーマ】

今週はパウロが教える律法の役割をさらに深く学びます。

【日曜日・律法と約束】

「それでは、律法は神の約束に反するものなのでしょうか。決してそうではない。万一、人を生かすことができる律法が与えられたとするなら、確かに人は律法によって義とされたでしょう」ガラテヤ3:21

律法と神の約束は役割が異なるのであって、決して両者が対立しあうために存在しているわけではありません。この点をまず抑えておく必要があります。その上で、「万一、人を生かすことができる律法が与えられたとするなら、確かに人は律法によって義とされたでしょう。しかし、聖書はすべてのものを罪の支配下に閉じ込めたのです」（ガラテヤ3:21～22）と続けます。つまり、人を救いに導くことができる律法はないということです。すべてが罪という大きな壁に支配されており、人間の力ではそれを打ち破ることが不可能なのです。万に一つの可能性もないのです。しかし、これには理由があるのだとパウロは続けます。

「…それは、神の約束が、イエス・キリストへの信仰によって、信じる人々に与えられるようになるためでした」ガラテヤ3:22

なぜ、人間は憎むべき罪の支配下に置かれているのか。それは唯一の希望であるキリストを信じるようになるためだったのです。永遠の救いを得るための可能性や希望を、イエス・キリスト以外ものに求めても、決して見出すことはできません。すべては罪の支配下に閉じ込められているとあるように、どんなに努力しても、罪という大きな壁を打ち崩すことができません。しかし、人間にはできないことでも神にはできます。罪の壁を打ち壊すことができない人間は、己の無力さに打ちのめされながらも、やがてキリストに目を向けるようになります。そして、そこにすべての解決、救いの入り口を見出すのです。

【月曜日・律法に下で】

「信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓示されるようになるまで閉じ込められていました」ガラテヤ3:23

「わたしたち」とは、パウロ自信も含めて、ガラテヤ諸教会のユダヤ人信者を念頭に語られていますが、「この信仰が啓示されるようになるまで」、律法の下で監視され、閉じ込められていたと言います。「信仰」に対して「この信仰」と表現しているから、キリストが現れる前の信仰と、キリストが現れた後の信仰との違いを意識しています。つまり、キリストへの信仰ということです。

「律法の下で」という言葉をパウロは様々な手紙の中で12回使用しています。文脈によって意味合いが異なります。

①　救いの代替方法として

救いを律法を行うことによって得ようとしているとき、「律法の下にいる」と表現し、それは不可能なことであり、実のところ、そうすることはキリストを拒んでいることになると指摘しました。

「律法によって義とされようとするなら、あなたがたはだれであろうと、キリストとは縁もゆかりもない者とされ、いただいた恵みも失います」ガラテヤ5:4

②律法の有罪判決の下にあるという意味として

律法はわたしたちの罪を明らかにするものです。そして、律法は罪を明らかにはするが、それを贖うことができません。ゆえに、皆が有罪判決の下にあることを「律法の下で」と表現することで表しています。

【火曜日・私たちの「監視」としての律法】

パウロは律法に対して、いくつかの結論をこれまで述べてきました。

①　律法は神様の救いの約束を無効にしたり、破棄したりはしていない。

②　律法と約束は対立するものではない。

③　律法は罪を明らかにする。

④　律法は人をキリストのもとへと導くための養育係。

そして、ここでさらに律法によって私たちは「監視され、閉じ込められている」ということ述べています。

「監視する」というギリシャ語の文字通りの意味は「保護する」という意味です。新約聖書の多くの箇所で「守る」という意味で使われています。

この世でも法律を犯せば罰せられますが、基本的に法律は社会を罰するためにはく、守るためにあります。律法もわたしたちを罰することを目的に与えられたのではなく、守るために与えられたのです。もし律法がなければ本当に恐ろしい世界になっていたことでしょう。クリスチャンも愛に生きたいとは考えなかったかもしれません。さらに、キリストの必要も感じなかったことでしょう。その意味では律法は私たちを守り、キリストからそれることがないようにと、わたしたちを監視し、またそこで閉じ込めてきたのです。

【水曜日・私たちの養育係としての律法】

「こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです」3:24

パウロは律法を養育係としてたとえています。養育係というギリシャ語「パイダゴーゴス」は、教育係、家庭教師、保護者などとも訳されていますが、当時ローマ社会において、主人の6，7歳になった息子を成人するまで責任をもって育てる権限が与えられていた奴隷がいましたが、彼らのことを表すのに使われていた言葉です。彼らは食事の世話から、学校に連れて行ったり、宿題を見たり、道徳的に大切なことを教えたりなど、何から何まで面倒を見ました。この「パイダゴーゴス」はとても厳格でした。時にはムチや杖を使ってたたくことによって確実に服従させました。このような意味の言葉が養育係という言葉の意味としてあることを知ると、律法の持つ意味がより明らかにさせられます。単にキリストのもとに案内するだけでなく、その途上では罪を指摘し、指導する厳しさも含まれた言葉なのです。しかし、その有罪宣告が厳しいゆえに、わたしたちを救い主のもとへと駆り立てるのです。

【木曜日・律法と信者】

「しかし、信仰が現れたので、もはや、わたしたちはこのような養育係の下にはいません」ガラテヤ3:25

もはや養育係の下にはいないという言葉が、律法はもはや意味を成さなくなったと理解されることがありますが、これは他の聖句から考えても正しくありません。では、どのような意味があるのでしょうか。

第一にそれは律法の有罪宣告の下にはいないという意味です。恵みの下にいるので、有罪宣告に怯える必要はありません。福音によって自由にされています。しかし、もし律法に従う必要などないというならば、それは罪に定められることになります。律法に従う必要がないと言うことは、キリストのみ旨に従う必要はないと言うことと同じであり、それはキリストのもとにいないことを意味するからです。

「従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです」ローマ8:1～3

律法はいまも有効なものです。しかし、キリストと結ばれているものは罪に定められることはありません。キリストと結ばれているからこそ罪に定められることがないのであって、キリストから離れれば事情は変わってきます。そもそもキリストから離れることを罪と言うのです。

律法は神様のご品性の写しです。私たちが律法を大切に生きることは、神様のご品性を反映するということです。また、キリストの模範に従うことでもあります。そして、イエス様との関係を通して、かつてなかったほどに律法に従う力を得るのです。